

二十四歳の青年、菊川浩二は盆休みとして、郷里の福岡市へ帰ってきている。福岡県の福岡市で、人口は、もうすぐ百五十万人だ。中心から西の早良区西新が、彼の実家「菊川酒店」がある場所だ。小さな川から西が西新で、一丁目の商店街の、十階建てのビルの一階に菊川酒店は、ある。そのビルは、菊川ビルという名称で菊川浩二の父、有正（ありまさ）が、先祖代々の貯金で建てたものだ。有正は居間で浩二に向かい合って座り、

「東京は、大変そうやね。地震とか、あるし。」

と何気なく聞くと、缶ビールのプルトップを引いて自分の口に当てる。

「ああ、そうだね。地震は、よく揺れるよ。」

この前の東日本大震災の時に、菊川浩二はA Vの撮影中だった。それも女優の中に、勃起したものを入れた瞬間、いきなり地震がグラグラと来たのだ。撮影しているカメラマンが倒れたので、そのシーンは撮り直しになったため、公開はされなかった。

「おまえ、俳優やりよるらしいけど(やっているらしいけど)、まだテレビには出とらんのか(出ていないのか)。」

「なかなか、ね。俳優も多いからなー、今は。」

「それじゃあ、生活は、どうする。」

「アルバイトを、しているよ。」

「ふーん。だめになったら、秀行の手伝いは、せえ(手伝いをしろ)。」

秀行とは浩二の兄で、九州大学法学部を出た後、有名なビール会社に入社して、三年の勤務の後に退社後は、菊川酒
店を継ぐべく仕事をしている。

「うん。兄さんは?」

「今日はな、商店街の集まりで、帰りは夜遅くなるとよ
(夜遅くなるらしいよ)。」

博多駅から地下鉄で、西新駅まで、そう時間は、かからな
いが、渡辺通りの近くを通過する時、浩二は昔、通った空
手道場を思い出した。その道場の名前は、研心流・空手総
本部という。貸しビルの一階に、五十畳ほどの道場がある。
エイヤツ、エイヤツと掛け声が、道行く人の耳にも聞こえ
てくるほどだ。館長の石垣(いしがき)・(・)島(しま)男(お)

は、沖縄県出身で、父親の転勤の関係から小学校の時に福岡市に移り住み、高校卒業後は、ボディビルジムのトレーナーをしていたが、空手の全日本選手権で優勝してからは、そのボディビルのジムのオーナーの出資で、中央区渡辺通りに道場を開いた。石垣・島男の空手は父親からの一子相伝のものであった。その道場は最初、あまりにも過酷な訓練を、させたため、三日と持たずに、やめる者が続出したため、今では、その方法は採らずに、各人各様の稽古をつけている。館長の秘儀の一つに

「天井落とし」

なるものが、ある。これは三角とびを発展させたもので、まず壁にジャンプして両脚をつけると、それを蹴って天井

に飛ぶ。天井に足を当てると、そこから真下の対戦相手に飛び込んで、手刀か正拳で一撃を決める。

もちろん、天井が低い場合に有効な技だ。体育館のようなところでは、これは使えない。渡辺通りの道場は天井が低いため、高弟達を集めて、その技を披露した。その時、相手を務めたのが、菊川浩二だ。館長が壁に飛んだのは見えたが、それからは浩二には館長の姿は見えなくなった。

「ここだ！菊川っ。」

と頭上で声が、突然したので見上げると、館長の二本の指は、浩二の両眼の一ミリ前で止まっていた。くるり、と空中で回転すると、床に館長は鮮やかに着地した。

「ああ、館長・・・お見事・・・。」

浩二は、それからは言葉は続かなかった。居合わせた高弟も皆、息を吞んでいた。石垣館長は、

「これも、秘儀の一つに、すぎない。他にも、まだ、あるのだ。」

「それを、見せてください！館長！」

皆は、異口同音に懇願したが、

「そのうちに、見せよう。」

と、静かに言い、館長は石垣島の海のように微笑んだ。

そんな、ある日、菊川浩二は館長に、稽古が終わった後、一人だけ呼ばれた。

「菊川くん、今日は別の秘儀を君に教えよう。では、館長室に行くぞ。」

「はいっ。おっす。」

二人は、道場内にドアのある館長室に入った。そこは六畳ほどで、机と椅子くらいしかない。その机の上から、館長はロープを取り出すと、浩二に渡した。そして、

「今から、私が全裸になるから、それで体を縛りなさい。」

と命じた。浩二は戸惑ったが、館長は空手着を上下とも脱ぎ、ブリーフも外すと全裸になった。筋骨逞しい上半身で、腹筋は三段に線が入っている。だらりと下がった男根は、それほど大きくもなかったが。

浩二が、眼を、そらせていると、

「何を、しておるか。早く、縛るのだ。」

「はいっ。おっす。」

浩二は急いで、館長を縛り始めた。館長は、両手を背中に回して、手首を、くっつけている。

「後ろ手に縛ってくれ。」

「おす。」

浩二は館長の手首を、ぐるぐると縛る。

「両脚も、だ。」

「おす。」

浩二が縛り終わると、館長は手足を動かし、

「よく縛れている。さて、」

と呟くと、机の上にある木の板を流し目で見ると、

「菊川、あの板を取って。」

「おす。」

浩二が板を持って来ると、

「こういう状態にすると、敵は必ず近づいてくる。なぶりものに、したい心境でな。そこで。」

そのとたん、館長の、いちもつ、は、ぐぐーん、という感じで、力強く勃起して上を向いた。その膨張率が、すごいものだ。浩二は注視して、しまった。

「このように勃起させれば、敵は、これに近づくと、手に握る奴も、おろう。その時に、だ。だが、おぬしの手は傷物に、したくないので、その板を私のペニスのすぐ横に、立てよ。」

「おす。」

浩二は、館長の勃起したものの、の横に板を当てた。

「それで、よし。手を動かすなよ。きえーいっ！」

怪鳥のような叫び声と共に、館長のペニスは横に振れて、
板に当たると、パキンツと音がして、その板は真っ二つに
折れた。浩二は、

「おおおおお。」

と感嘆の声を、大きく、あげた。さらに館長は、上半身を
前に倒すと、ロープに自分の勃起したペニスを強く当てる、
すると、それは、ぶつん、と切れた。

「これで、両脚は自由となった。これだけでも、闘えなけ
れば、いかん。が、手は、ね。」

手首のところのロープに、親指をかけると、ぶちっ、と、
それも切ってしまった。館長が、

「ふーむ。」

と呼吸を整えると、館長のペニスは小さくなっていった。

ニヤリ、とすると石垣は、

「これを、ナイフペニスの技といい、我が家系に、代々、
伝わったものである。鍛錬法は、そのうち教えようと思う。
私の代から秘伝は、なるべく公開していくから、楽しみに、
な。」

「おす！」

浩二は思わず、その場に片膝を着いて、いたのだった。

その時、浩二の年齢は二十歳だった。先生が、自分を前に
勃起させた事について、立膝のままで、

「このような場合、自分は勃起できるか、心配です。」

と、師匠を見上げながら尋ねると、

「なに、女の裸を思い浮かべるのだよ。」

「なるほど。しかし・・・。」

「しかし？」

「自分は空手に強くなりたいために、女と、つきあいませ
んでした。」

石垣島男は、ブリーフを履くと、

「今の技は勃起しないと、できない。女と、つきあわなく
ても、アダルトビデオを見れば、よい。」

「は。パソコンは持っています。光ファイバーで、見れま
す。」

「ならば、ダウンロードも早く、できる。DVDならネッ
ト通販で買えば、送料無料で、送ってもらえるぞ。今のパ
ソコンにはDVDプレーヤーは、ついておるからの。実は、

私も見ておるのだ。最近では、絵色千佳が、お気に入りだ。

さっきは、な、絵色千佳を思い浮かべたのだよ。」

浩二はアダルトは、ちらちら、と見るだけだった。無料サンプル動画だけで、それ以上は見していない。

「おす。先生、ぼくも勃起のため、DVDを見ます。」

「よろしい。やりなさい。ペニスに自信が、ついたら、報告する事。」

「おす。」

その日は、それで道場は終わりだった。確かに、浩二は中学、高校と空手に明け暮れていた。硬派な男性に女性は近づかない。特に武道関係は、そういえるだろう。最近、法廷で裁かれている柔道の男性も、相手は自分の近くにいる女子柔道部員のみを、相手にしている。浩二だけでなく、

同じ空手部員も彼女が、いなかった。浩二の高校には女子空手部も、なかったし、女子柔道部も、なかった。おまけに男子校なので、女子高生を見ることすら、稀だったのだ。学校の空手の部活が終わると、研心流道場に地下鉄で通っていたのは、中学生からで、それで今では石垣館長の高弟の一人に、数えられるようになっていたのだが、初恋の感情を覚える相手の女性とて、見回しても、いなかった。ただ、一年上の空手部の先輩に、憧れ、とも、つかぬ思いを持っていたのは、浩二は覚えている。その先輩は高校を卒業すると、東京のインターネット関連の会社に就職が決まって、福岡を去った。その先輩の名前を、見川毅（みかわ・つよし）という。その頃の、学校の春休みに、西新商店街で浩二は見川先輩と、ばったり出くわした。

「おす。見川先輩。」

と、挨拶して頭を下げる浩二に、鷹揚に、うなずくと見川

は、

「おれ、東京に行くけん(行くから)、お別れかな。菊川。」

「えっ、そうでしたか。ぼく、その事を、知りませんでした。」

「うん。昨日、入社式から帰ってきたとよ(帰って来たんだ)。新宿で、あったたい(あったんだ)。」

「入社、おめでとう、ございます。」

「立ち話も、なんやけん(なんだから)、おれが、おごる。ラーメンを、食いに、いこう。」

「おす。ごちそうに、なります。」

すぐ近くの博多ラーメンの店に入ると、二人はテーブル席で、向かい合って座った。見川は店の主人に

「大盛りラーメンを、二つ。」

と注文すると、浩二の方に向き直り、

「それがくさ(それがね)、インターネット関連の会社よ。売り上げも急進中らしい。」

「すごいですね。ぼくも、その会社に入りたいな。」

「おまえは自分の店が、あるやないか(あるだろうが)。菊川酒店が。」

「でも、ぼくは次男だから、気にしなくても、いいんですよ。」

「そうか。まあ、おれ、メールするたい。おまえのメールアドレスば、教えれ(メールアドレスを教えろ)。」

浩二は携帯電話を取り出すと、メールアドレスを表示させ、見川先輩に見せた。見川は自分も、携帯電話を取り出し、

「なら、ここで送ろう。」

と言うと携帯を操作した。間もなく浩二の携帯に、着信メロディーが鳴った。見川は笑うと、

「見ろよ。メール。」

と促した。浩二がメールボックスを見ると、そこには見川のメールが入っていた。

「確かに、届きました。」

「うーん。便利たい。おれたちの小さい頃は、こげなもん(こんなもの)は、なかったもんね。」

「そうでしたね。」

その時、店主が大盛りラーメンを二つ両手に抱えて二人のテーブルに置いた。見川は、

「沢山、食べるよ、菊川。」

「はい。それでは、いただきます。」

二人は猛烈な勢いで、大盛りラーメンを食べると、見川は、

「替え玉しょうか？」

「はい。お願いします。」

見川は店主に向かって

「替え玉ふたつ。」

と注文した。それも軽く、たいらげると、見川から先に店を出た。外は道行く人も、まだ少なかった。買い物の時間帯では、なかったせいだ。見川は店を出て、少し歩くと立

ち止まった。そして浩二の方に姿勢を向けると、右手を差し出して、

「しばし、の別れかな。」

浩二は無言で自分の右手で、見川の手を握った。見川は、握手している手を持ち上げて、自分の顔に近づけると、浩二の右手の甲に口づけた。浩二は、（あっ）と思った。先輩の舌まで、感じてしまったのだ。見川は手を離すと、

「なんか、連絡したい時に連絡くれよ。」

と話すと、浩二の歩いて行く方向とは逆の方へ、軽やかに歩いて行った。浩二より五センチ、背の高い先輩だった。

その時から、浩二は二十歳になるまで、見川先輩にメールを出した事は、なかった。